

自分の物語を正しいしよから正しいしよまで書きましよう。

タイトル こんじき山の鬼たいじ

S・K

作

むかしむかし、こんじき山のふもとの村に、えいたろうという若者が住んでいました。えいたろうは大食らいで、かたがた大きく、村で一番の力持ちでしたが、とにかくちえがありません。それでも、垂善我を守るために、いしょうけんめいな若者だったのでした。

そのころ、こんじき山にはおそろしい鬼が住んでいて、村人たちを苦しめていました。山から下りては、こっそり、村の食べ物や道具をぬすんでいくのです。村人たちは、えいたろうにお願いをしました。

「お願いです。鬼をやっつけてくれませんか。他の村人が、

どうしても返してもらいたいものがあるので。それは村につたわる大切な宝箱です。その宝箱だけは、わたすわけにはいかないのです。」  
 そつで、えいたろうは、鬼をやっつけようと決意しました。

「よききた、ぼくにまかせてくれ。かならずとり返してくるから、みんなはかくれていてください。」

と、えいたろうはきっぱり言いました。まずは鬼のことをよく知るオミツさん

と作戦会議です。

「こんじき山に住んでいるのは、さかさま鬼よ。鬼の言うことばの意味をさかさまにして言えば、どんどん弱くなるの。そうすれば、刀のいちびきでたおせるわ。でも、しばいするとどんどん強くなるから、気をつけて。」

そして、えいたろうは、鬼についてしつ問を始めました。

「鬼の名前は何か？」  
 「はるよ。」

「鬼の色は？」  
 「緑色よ。」

「とくちょうは？」  
 「金の金ぼうを持っているわ。」

「ありがとう、オミツさん。かならず宝箱をとりもどして、さかさま鬼をこらしめまします。」  
 そのころ、こんじき山ではさかさま鬼が待ちかまえていました。村人が集まって、えいたろうをおくりだす様子から見下ろしていたのです。

「このこと山に来るな。あの刀ももらってやるうじゃないか。」

えいたろうが、タガタの山道を進むと、わらんできた小屋がひとつ見えました。

その横には、人玉ぼうを持っていた鬼が、いよいよ立ちで立っていました。

「えいたろうは、力強く言いました。

「ぼくはえいたろうだ。はる宝を返せ。」

そして、鬼にむか、てさ、と走り出しました。

すると、鬼は金ぼうをふり上げて、どしん

どしんとえいたろうにむか、てきました。そして

て、えいたろうにむか、て歌うように言いました。

「まぬけなやつだぜ、えいたろう。鬼よりまぬけ

なえいたろう。」

「えいたろうは次のように文をながら、刀をふり上げました。

「うろたいえな、けぬまりよにお。うろたいえ

ぜ、たつやな、けぬま。」

心配になって、こうそり後についてきたオミッ

ツさんが木のかげからつぶやきました。

「ああ、ちがう。鬼が大きくな、ちやう。」

オミッさんの目の前で、さかさま鬼は二倍く

らいの大きさになり、えいたろうの刀を人指

し指一本で下げてしまいました。

「えいたろうが、ふたたび刀をかまえると、

さかさま鬼も、ふたたび歌うように言いまし

た。

「まぬけなやつだぜ、えいたろう。鬼よりまぬけ

なえいたろう。」

「えいたろうは次のように文をながら、また

刀を高くふり上げました。

「まぬけじゃないやつだぜ、えいたろう。鬼よりまぬけじゃないやつだぜ、えいたろう。」

「ああ、ちがう。鬼が大きくな、ちやう。」

オミッさんが言、ても、もうおそい。鬼は十倍

くらいの大かさになり、えいたろうの刀を小指

一本でひいと下げてしまいました。

そして、木のかげからとび出して、オミッさんが言、ました。

「えいたろうさん、カタリベ先生の教えを思、

い出して。」

「そうだった。まぬけじゃないだと、打ち消して

いるだけだ、たんだ。今度こそ。」

「えいたろうは、ふたたび刀をかまえました。

巨大になった鬼も、ふたたび歌うように言、

ました。

「まぬけなやつだぜ、えいたろう。鬼よりまぬけ

なえいたろう。」

「えいたろうは刀をふり上げながら、自信

た、ぶりに次のように文を言、ました。

「うろたえなやつだぜ、えいたろう。鬼よりり

こうなえいたろう。」

「ひよええ。まさか負けました。」

鬼はみるみるうちにひよこほど小さくな、て、

山おくににびいていきました。

「よくやったわね、えいたろうさん。ありがとう。」

「オミッさん、ついてきてくれていたのか。アドバ

イスがなかったら、鬼をや、つけられなかったよ。あ

りがとう、オミッさん。」

ほとした二人は、やくそくの宝箱をさがしに小屋の中へ行きました。

こうじて、えいたろうとオミッさんは、さがさま鬼をたおすことにせいこうしました。大切な宝箱もとりもどし、村にも平和がもどってきました。

村人たちは安心して生活できるようになり、子どもたちも毎日外で遊ぶようになりました。

実は、その宝箱の中には、金色にかがやくさくらんぼの種が入っていました。そこで村中の人が集まって、その種を植えました。すると、みるみるうちに種からめが出て、あっという間にりばな木になりました。そして、金色の桜の花が次々とさいて、たくさんのカピカのカピカが咲きました。

「おまつりだ！」

村中の人たちみんなで、仲よく分けて食べました。そして、その種は宝箱に大切にしまわれました。

来年の春、またおまつりの日に村人みんなで食べられますように。